

長野県松本市

ARIGASAKI

蟻ヶ崎遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1998.2

松本市教育委員会

長野県松本市

ARIGASAKI

蟻ヶ崎遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1998.2

松本市教育委員会

序

松本市街地には原始・古代の集落跡から近世松本城とその城下町に至るまで、数多くの埋蔵文化財が残されています。このたび市街地の一角、蟻ヶ崎地籍において県営住宅蟻ヶ崎団地の建て替え工事が行われることとなり、当該地で遺跡の確認調査を行った結果、古代の集落跡が存在することが判明しました。しかし県営住宅建設により貴重な文化財である遺跡が破壊されるため、事業者である長野県住宅部と松本市教育委員会が埋蔵文化財の保護について協議を行った結果、緊急発掘調査によって遺跡の記録保存を図ることとなり、長野県住宅部から松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施するに至ったものです。

市教育委員会では調査団を組織し、平成9年の10～11月にわたって調査を行いました。遺跡地にはもともと県営住宅の建物が存在したため地面が大変硬く締まり、折からの水不足による乾燥も手伝って掘り下げの作業は過酷を極めました。参加者の皆様のご尽力により無事終了することができました。その結果、奈良時代から平安時代に至る生活の跡を見出すことができました。これらは学術的価値が非常に高く、地域の歴史解明にも大いに役立つ資料になることと思います。

しかしながら開発事業に先立って行われる発掘調査には、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わるものの苦悩は絶えません。本書を通して貴重な文化財の保護とその施策へのご理解を深めていただければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただいた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大なご理解とご協力をいただいた長野県住宅部、県営住宅蟻ヶ崎団地をはじめ地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成10年2月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

例 言

- 1 本書は、平成9年10月17日～11月29日に実施された松本市鎌ヶ崎に所在する鎌ヶ崎遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は平成9年度県営住宅鎌ヶ崎団地建設事業に伴う緊急発掘調査であり、長野県住宅部より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、I:事務局、II-1:森 義直、IV-2(1):竹内清長、その他を竹原 学が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。

遺物洗浄 五十嵐周子、内沢紀代子、百瀬二三子

遺物保存処理・復原 五十嵐周子、内沢紀代子、内田和子、洞沢文江

遺物実測 竹平悦子、洞沢文江、松尾明恵、三宅康司

遺構図整理 石合英子

トレース 内田和子、岡嶋八重子、竹平悦子、洞沢文江、松尾明恵、三宅康司

版 翻 石合英子、内田和子、洞沢文江

写真撮影 長橋重幸・荒木 龍 (遺構写真)、宮嶋洋一 (遺物写真)、エアータック (航空写真)

総括・編集 竹原 学

- 5 本書で使用した遺構の略称は次の通りである。

竪穴住居跡→住、土坑→土、ピット→P、溝状遺構→溝

- 6 図中で用いた方位記号はすべて真北方向を指している。

7 遺構・遺物の記述中で用いた奈良～平安時代の時期区分については下記文献の土器編年に拠っている。

小平和夫 1990 「第5節 古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 一松本市内その1— 総論編』

(財)長野県埋蔵文化財センター

- 8 遺構図中の土層名は記号化している。各記号の説明は以下の通りである。

表記法 土色 (混入物・量) 混入物量 a 少量 b 中量 c 多量

土 色

1 褐色	6 黄褐色	11 暗灰色	16 黄 色	21 砂
2 暗褐色	7 茶褐色	12 黒灰色	17 暗黄褐色	22 砂 礫
3 黒褐色	8 灰褐色	13 赤灰色	18 暗茶褐色	23 緑灰色
4 明褐色	9 橙褐色	14 黄灰色	19 黒 色	
5 赤褐色	10 灰 色	15 青灰色	20 焼 土	

混入物

A 小 礫	F 炭化物塊	K 茶褐色土粒	P 砂 粒	U 灰色土粒
B 礫	G 炭化材	L 黄色土塊	Q 黒色土塊	V 灰色土塊
C 焼土粒	H 黄色土粒	M 黄褐色土塊	R 黒色土塊	W 赤褐色土粒
D 焼土塊	I 黄褐色土粒	N 橙褐色土塊	S 暗褐色土粒	X 赤褐色土塊
E 炭化物粒	J 橙褐色土粒	O 茶褐色土塊	T 暗褐色土塊	Y 鉄 分

- 9 本調査で得られた出土遺物および調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館 (〒390-0823 長野県松本市中山 3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189) に収蔵されている。

目 次

序	
例 言	
目 次	
I 調査の経緯	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
II 遺跡の環境	
1. 遺跡の立地と地形・地質	2
III 調査概要	4
IV 調査成果	
1. 検出遺構	
(1) 竪穴住居址	8
(2) 土 坑	12
(3) ピット	12
(4) 溝状遺構	12
(5) 不明遺構	12
2. 出土遺物	
(1) 土 器	20
(2) 鉄 器	22
V まとめ	28
カラー図版	
報告書抄録	



▲ 調査地点

第1図 調査地の位置と周辺遺跡

I 調査の経緯

1.調査に至る経過

蠟ヶ崎遺跡は松本市街地の北部、蠟ヶ崎一帯に所在する、縄紋時代～奈良・平安時代の複合遺跡である。しかし、正式な発掘調査がこれまで行われていないこと、遺跡地が早くから宅地化しているため、その実態はほとんど不明なまま今日に至っている。

こうした中、平成10年に蠟ヶ崎3丁目に所在する県営蠟ヶ崎団地の建て替え事業が計画された。当該地は遺跡地図上での蠟ヶ崎遺跡の範囲からはわずかに外れていたが、中期古墳として知られる饅頭塚古墳に近接し、あるいは周溝等が用地内に存する可能性があること、また地形的に西大門沢川に面した適地であり、他の遺構等の存在も見込まれた。

そこで松本市教育委員会は事業主体である長野県住宅部と遺跡の保護について協議を行い、当該地における遺構・遺物の有無について確認するため先ず松本市教育委員会が遺跡の試掘確認調査を実施することとし、その結果を受けて再協議を行うこととなった。試掘確認調査は既存の県営住宅建物の解体が終了した同年10月に行われ、饅頭塚古墳に係る遺構こそ確認されなかったものの、事業予定地内のほぼ全域で奈良～平安時代の遺物が出土、東側部分では住居址や上坑の存在も確実となり、集落址の存在が明らかとなった。

試掘調査の結果を踏まえ再び当事者による協議を行った結果、住宅建設による遺跡の破壊は避けられないとの結論に至り、保護措置として工事着手前に緊急発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図ることとなった。また調査および調査に係る事務処理については長野県住宅部より委託を受けた松本市、松本市教育委員会が行うこととした。松本市教育委員会では次節に示したような発掘調査団を組織して、平成9年10月より現地における調査を実施し、終了後引き続き室内における整理作業および本報告書の作成を行った。

なお調査地点については結果から判断して最終的に蠟ヶ崎遺跡の範囲に含まれるものと解釈し、この遺跡名を用いることとした。

2.調査体制

調査団長 守屋立秋（松本市教育長）

調査担当者 長橋重幸、竹原 学、荒木 龍

調査員 三村 肇

協力者 浅井信興、荒井留美子、飯田三男、石井脩二、市場茂男、上兼昭一、大月八十喜、神田英次、小松正子、斉藤政雄、清水 究、鈴木幸子、鷺見昇司、高橋登喜男、寺島 実、中上昇一、中村地香子、中村安雄、中山自子、林 武佐、丸山恵子、丸山喜和子、御子榮長寿、村山牧枝、夔 国成、百瀬義友、山崎照友、横山 清、米山貞興

事務局 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、村田正幸（文化財担当係長）、近藤 潔、田多井用章、川上真澄

Ⅱ 遺跡の環境

1. 遺跡の立地と地形・地質

(1) 鎌ヶ崎遺跡付近の地形・地質の概観

松本市及びその周辺部は、フォッサマグナ地帯の北部に位置し、新第三紀層とその頃貫入した火成岩類及びそれ以後の火山岩類よりなり、第四期洪積世の島弧変動によって生じた構造盆地と、その周辺部からなっている。本遺跡を西端とする旧松本市街地は、南に開け三方を新第三紀層の山地に囲まれている。旧市街地の堆積物は、主に薄川と女鳥羽川の堆積物により形成されているが、下部の堆積物の中には梓川の礫が混入し、深くなるにつれて多くなっていることが、かつて南源池のボーリングの結果明らかである。

礫の岩質について

梓川系は、粘板岩・硬砂岩・花こう岩・チャートなどが主であり、東から旧市街地に流入する薄川系は、緑色火山岩類・安山岩・石英閃緑岩などが主である。一方、北から南流して盆地に流入する女鳥羽川系の礫は、ひん岩・砂岩・溶結凝灰岩（ガラス質安山岩）が主である。

薄川と女鳥羽川について

現在薄川は三峯山の西側を源流とし、鉢伏山の北東の麓を西北に流れ美ヶ原袴腰・武石峰方面からの支流と合して、入山辺地区の西端付近を扇頂とする扇状地を西に向かって形成している。扇状地の北側は湯川付近を境として女鳥羽川の扇状地と接している。

女鳥羽川は本遺跡と直接関係があり、三才山峠及び武石峰付近に源を発し、多くの沢を合わせて西流し稲倉で流路を90°南に変え松本市に流入し、白板付近で田川に合流している。女鳥羽川による扇状地は、稲倉付近を扇頂として南方へ広がり岡田地区から松本市街地に及んでいる。

段丘は左岸には、はっきりとは認められないが、右岸には三段の段丘が認められ段丘面はいずれも東に向かって緩く傾斜し、西部の山地から崖錐性の堆積物が載っている。

第1段丘面は岡田地区の矢作・神沢面。

第2段丘面は伊深・岡田町から深志高校・丸の内中学面。

第3段丘面は現在の氾濫原面。

第1・第2段丘面は、西部山地の新第三紀層やその上に載るロームを含む崖錐性堆積物が相当混入しており、さらに岡田地区では第1段丘面と第2段丘面の間にも亜段丘がみられ、岡田町の東側には第2段丘面と第3段丘面の間にも亜段丘が認められる。

このことは地盤の隆起が決してスムーズに3回起きたわけではないことを物語っている。

女鳥羽川は河況係数（年間の最小流量に対する最大流量の比）が特に大で、本郷村水汲付近までは常時水流量があるが、それより下流は渇水期には伏流水となる。河況係数が大であるということは非常に荒れ河であることを示し、洪水時には大量の土砂を一気に押し出し、そのため今までの流路をふさぎ、流路が変わることもしばしば起きていたことが岡田地区の発掘の結果明らかで、平安後期までは女鳥羽川の主流又は大きな支流が岡田町の西を山麓に沿って流れ、第2段丘崖の裾を洗い本遺跡の東を流れて、白板付近で田川と合流していたと推定される。この流路の消滅は、平安後期頃の大洪水により河自身の押し出した大量の土砂のため、それまでの流路を埋め、東に流路を変えたことが、先年の岡田町の発掘で明らかになった。

(2) 発掘地点の地形と地質

本発掘地点は松本市の旧市街地の西端、城山から芥子望主に延びる筑摩山地の東麓で、女鳥羽川により形成された段丘面上にある。この段丘面は女鳥羽川がその右岸に作った三つの段丘面のうちの第2段丘面で、発掘地点の標高は610m前後である。

地形は概観のところでも述べたごとく、一口で言えば第四紀洪積世の造盆地運動と、それに続く本遺跡西部地域の傾動隆起により山地化し、三方を筑摩山地に囲まれ南に開けた旧市街地の盆地が形成された。

即ち、女鳥羽川も洪積世末期頃までは現在の西部山地付近を流れていたことが、城山の展望台付近に旧女鳥羽川の河川堆積物が厚く堆積していることからわかる。

その後城山-芥子望主方面に延びる地域は傾動しながら隆起し、その結果旧女鳥羽川の流路は東に押しやられ、傾動してできた西部山地の上には峯の平遺跡付近でみる如く洪積世最後のロームが数十cmの厚さで載っている。東に移った流路は首振りにより扇状地を作り、三回の隆起により三面の段丘を生じ現在の地形が形成されるに至った。

発掘地点は第2段丘面上にあり緩く南東に傾斜している。この段丘面の土層は女鳥羽川の堆積物である灰褐色の砂礫層の上に、傾動してできた西部山地から新第三紀層の風化物・旧女鳥羽川の堆積物・その上に載っているロームなどが崖錐となって移動混入し複雑な堆積物の様相を呈している。

発掘地点の地山を作っている黄褐色粘土層は西部山地から沢水や雨水により流下し、第2段丘面の砂礫層の上に載ったものであり、レンズ状に分布して厚薄の違いが顕著である。

(3) 遺跡付近の古環境について

発掘地点付近は平安時代の中頃までは、前述した如く女鳥羽川の本流又は大きな支流が岡田町の西、西部山地の山麓を流れており、本遺跡の東、百数十mの第2段丘崖の裾に沿って南流し、その間西部山地からは幾筋もの沢が合流していたものとみられる。その沢の1つとして発掘地点の東、数十mのところには、当時も利用されたとみられる西大門沢が南流し、旧開智学校付近で古女鳥羽川と合流して白板付近で田川と合したものと推定される。この古女鳥羽川は平安中期～後期頃の大洪水により、流路を変え岡田町の東を流れるに至った。

当時この遺跡付近の住人は、西大門沢の少し上流から溝を掘って水を引いて使ったり、直接西大門沢の流水を利用したものとみられる。

この付近一帯は三方を山に囲まれ、南東に開けた高台であるため、日当たりが特に良好で北風は弱く南風が卓越している。したがって住居としての環境は良好であるが、南風が強いため当時カマドの位置には苦労したと推定される。

Ⅲ 調査概要

松本市蟻ヶ崎地区に所在する蟻ヶ崎遺跡は、松本平市街地の北西部に位置し、城山丘陵北側より南下する西大門沢川右岸の南向き緩斜面上、標高611m付近に立地する奈良～平安時代の集落址を主体とする遺跡である。遺跡の現況は大半が宅地や道路となっている。

この地域における遺跡の実態は早くから市街地化したこと、正式な発掘調査を経た遺跡が少ないこと等から遺跡の広がりや遺構の状況等、現在まで詳細は不明なままであった。松本市遺跡地区によると蟻ヶ崎遺跡の範囲は県道より西側に設定されており、今回の調査地は遺跡の範囲外となっている。

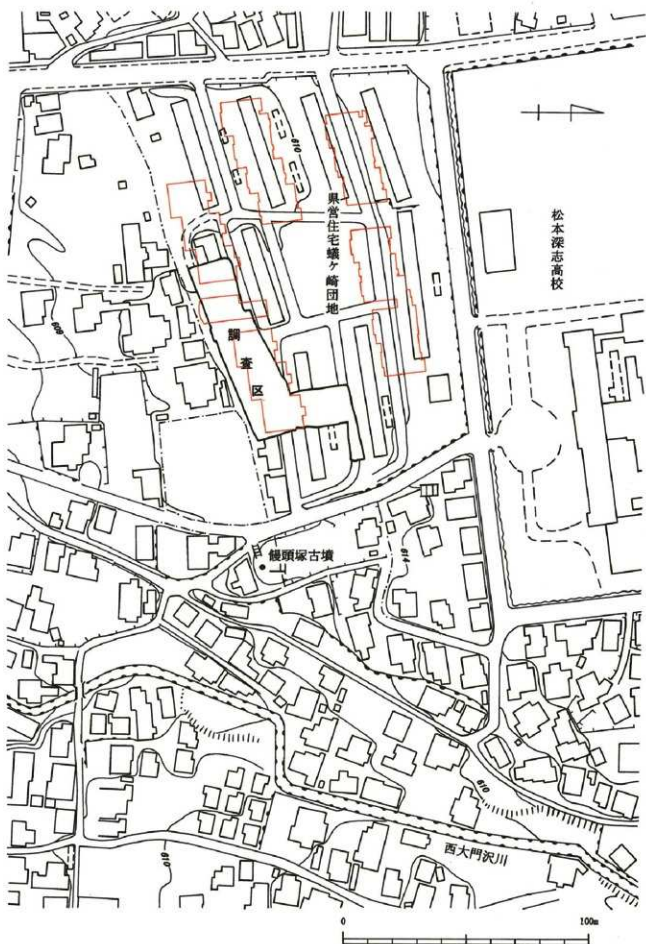
今回計画された県営蟻ヶ崎団地の建て替え事業は、市街地の開発としては大規模で広範囲にわたる。しかしながら現状では当該地内における遺構・遺物の有無と分布状況がまったく不明なため、市教委では市内遺跡確認事業として事前に対象地内の試掘確認調査を行い、その結果を受けて再協議の上、県営住宅建て替えに伴う事業として蟻ヶ崎遺跡の発掘調査を行うことが決定、試掘のデータから調査範囲を選定し平成9年10月に本調査を実施するに至った。なお対象地南東の一部については平成10年度に松本市によるデイサービスセンター建設が予定されているため、別事業として今回の調査範囲からは除外した。

調査の方法は建物建設部分を中心に設定した範囲について、遺構の掘り込まれる黄褐色土層面まで重機で表土を除去した後人力で遺構確認、掘り下げ作業を行い、調査終了後再び重機にて埋め戻しを行った。遺構などの測量記録は真北方向に沿って任意の3m方眼を設定して行った。

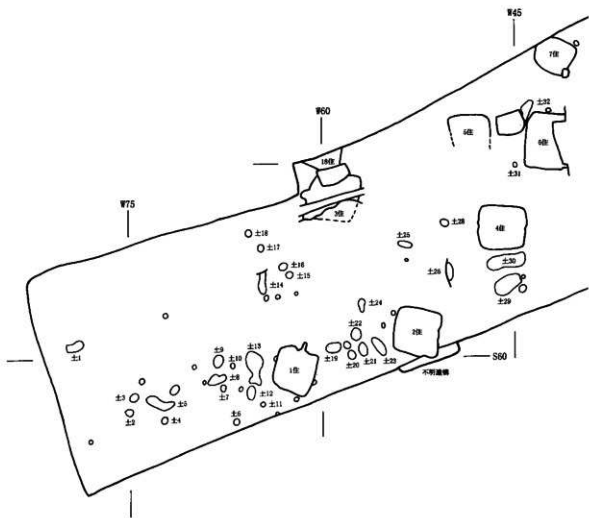
次に調査区の土層構成について触れておく。表土は県営住宅建設・解体時の攪乱土が調査地全体を30～40cm程覆い、遺構検出面あるいはそれより下層まで及んでいた。遺構の掘り込まれる基盤土は黄褐色土か暗黄褐色の礫層とともに粘性が強く、北から南へ緩く傾斜する。現地表面はほぼ水平に造成されているため、調査地南端部では基盤土を覆う旧地表である暗褐色土が良好に残存する反面、北半部では団地造成時の削削が著しく、従って遺構も覆土の大半が失われ、残存状況はよくない。黄褐色土は調査区北東部、西部に分布し、南東部では広く暗黄褐色礫層が分布する。

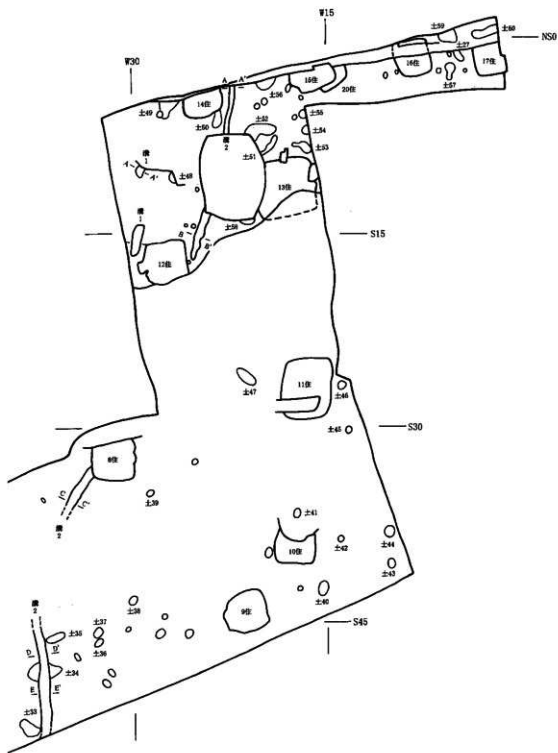
調査の実施期間、面積、検出遺構、出土遺物の詳細については以下に列記しておく。

調査期間	平成9年10月17日～11月29日
調査面積	1,778㎡
検出遺構	竪穴住居址 19棟 (奈良～平安)
	土坑 30基 (奈良～平安)
	ピット 51基 (奈良～平安)
	溝状遺構 2条 (奈良～平安)
	不明遺構 1基 (奈良～平安)
出土遺物	奈良～平安時代 土器 (土師器・須恵器)
	鉄器 (釘)・鉄滓



第2図 調査範囲





第3図 遺構配置

Ⅳ 調査成果

1. 検出遺構

(1) 竪穴住居址 (第4～7図)

① 第1号住居址

位置 S60-W60 平面形 長方形 規模 長340×短296×深-28cm

床面積 7.7㎡ 主軸方位 N-18°-E カマド 北壁中央・石組

遺構 P10・11を切る。黄褐色土層中に掘り込まれ、保存状況は良好。北東部の覆土中には礫が多い。床面はカマド周辺を中心に堅く締まり、中央部で緩く窪む。カマドは天井の石材の一部と、礫を芯材にして厚く黄褐色粘土を貼った両袖、煙出し、支脚石を残す。火床面、内壁は顕著に赤化するが、奥壁へ煙出し底面はほとんど焼けていない。柱穴は有さない。屋内施設としては北東隅に円形の浅い貯蔵穴があり、カマド側の側縁に長方形の平石が据えられていた。またカマド西側の北壁に貼り出し部があり、これも貯蔵等に係る施設と考えられる。

遺物 少数だが完形、あるいはそれに近い土器が出土している。カマド内には完形の土師器甕、カマド左脇の床面に須恵器鉢が逆位に、そのすぐ西南に墨書のある須恵器杯が正位に、北壁の張り出し部にも須恵器杯が逆位に置かれる。その他覆土中からも半完形の須恵器杯等が得られている。

帰属時期 出土土器の様相から6期の遺構と考えられる。

② 第2号住居址

位置 S57-W51 平面形 方形 規模 長372×短352×深-22cm

床面積 10.4㎡ 主軸方位 N-101°-E カマド 東壁中央・石組

遺構 不明遺構を切る。礫混じりの黄褐色土層中に掘り込まれる。覆土中には礫が散在する。床面はカマドへ中央部で非常に堅い。カマドは上部を失い、わずかに焼けた火床面と、両袖の基底部のみ残存する。柱穴は見られず、浅いピットが6基検出されたのみである。

遺物 カマド左脇に鉄器と土師器杯、カマド内に土師器甕片が遺存していた他、覆土中から鉄釘、鉄滓が出土しているが、総体に遺物は少ない。

帰属時期 土器から見て5期頃の遺構と推定される。

③ 第3号住居址

位置 S45-W57 平面形 長方形 規模 長416×短(380)×深-6cm

床面積 (14.5)㎡ 主軸方位 N-77°-W カマド 西壁中央・張出?

遺構 北壁と南へ東部を擾乱され、壁はごくわずかに残るのみである。床面は小礫を多く含む黄褐色土層中にあり、堅緻な面をなす。カマドは火床面のみ残し、非常によく焼けている。ピットは北東隅、南西隅から合計3基が検出されたが、柱穴とすべきものは見られない。

遺物 保存状況の劣悪な遺構にしては床面上に残された遺物が多い。カマド火床面には土師器甕片が多量に集積、南西隅のピット内から須恵器杯、北寄りの床にも須恵器甕の下半部等が遺存していた。

帰属時期 土器から見て5～6期の遺構と考えられる。

④ 第4号住居址

位置 S48-W45 平面形 長方形 規模 長376×短336×深-28cm

床面積 9.8㎡ 主軸方位 N-95°-E カマド 東壁中央・石組

遺構 小礫混じりの暗黄褐色土層中に掘り込まれ、四壁とも残存良好。覆土中には南西部を主体に礫が多く廃棄される。床面は平坦で非常に堅い。カマドは両袖をよく残し、天井の構築材と考えられる大礫が焚口周辺に散乱する。柱穴その他のピットは見られない。西壁に接して焼上の散在があり、壁も膨んでいる。

遺物 覆土中からの遺物の出土は北西部で多い。床面上や屋内施設からの一括遺物は、カマド内に土師器甕類の破片が多く残される他、南西隅に土師器杯3点・小型甕2点、須恵器杯蓋1点・杯5点が南壁に沿って2列に並べられ、2箇所では2枚重ねになっていた。床面中央には須恵器甕の底部破片が散乱していた。

帰属時期 豊富に出土した土器の様相から見て5期の遺構と考えられる。

⑤ 第5号住居址

位置 S42-W48 平面形 (長) 方形 規模 東西312×南北?×深-6cm

床面積 ? 東西軸方位 N-78°-E カマド 東壁?

遺構 北部を除く遺構の大部分を削平により失う。床面は礫層中にあり薄く黄褐色土を貼る。カマドは不明だが、東壁下に炭粒の散布が認められた。北東隅には浅いピットが見られる。

遺物 わずかに土師器小破片を得たのみである。

帰属時期 遺物がないため不明。

⑥ 第6号住居址

位置 S42-W42 平面形 (長) 方形 規模 南北420×東西?×深-6cm

床面積 (9.3)㎡ 東西軸方位 N-95°-E カマド 東壁?

遺構 東半部を掘乱で失う。床面は暗黄褐色礫層中にあり、黄褐色土を薄く貼る。壁沿いに5基のピットを検出するがいずれも浅い。カマドは東壁に存するものと考えられる。

遺物 北西寄りの床面上に完形の土師器小型甕が倒立していた他、遺物は皆無に等しい。

帰属時期 土師器甕から見ておよそ6期頃の遺構と推定される。

⑦ 第7号住居址

位置 S36-W39 平面形 方形 規模 長296×短268×深-16cm

床面積 (6.3)㎡ 東西軸方位 N-117°-E カマド 東壁?

遺構 北西隅は区域外にかかる。暗黄褐色礫層中にあり、床面は黄褐色土を貼る。東壁下に炭粒の散布が認められ、あるいはカマドの可能性はある。ピットは東北隅より2基が見出された。

遺物 覆土や床面からの一括遺物は出土していない。

帰属時期 わずかな遺物から見て6-7期頃の遺構と推定する。

⑧ 第8号住居址

位置 S30-W30 平面形 方形 規模 長336×短332×深-20cm

床面積 (8.1)㎡ 主軸方位 N-92°-E カマド 東壁中央・石組

遺構 溝2を切る。北壁を掘乱で失う。覆土中に多量の礫が廃棄される。床面は暗黄褐色礫層中にあり、貼土を施す。カマドは礫を芯材にした両袖、火床面が確認された。柱穴等、ピットは見当たらない。

遺物 非常に少ない。カマド内に土師器甕片が遺存する。

帰属時期 わずかな遺物から5～6期頃の遺構と推定する。

⑨ 第9号住居址

位置 S42-W21 平面形 方形 規模 長320×短316×深-16cm

床面積 7.6㎡ 主軸方位 N-102°-W カマド 西壁中央・石組?

遺構 暗黄褐色礫層中に構築されるため把握が困難で、西壁-南壁を削平してしまった。覆土中には礫が見られ特に中央部に集中する。カマドは火床面のみ確認、焼土が広がる。柱穴等の施設は未検出である。

遺物 カマド内外から土師器甕片等が出土した。

帰属時期 出土土器から見て5～6期頃の遺構と推察される。

⑩ 第10号住居址

位置 S39-W15 平面形 (長) 方形 規模 東西324×南北?×深-12cm

床面積 不明 主軸方位 N-93°-E カマド 東壁中央・石組

遺構 北部を攪乱される。暗黄褐色土層中に掘り込まれ、貼床を施す。カマドは火床面のみ残存し全体に構築材の黄褐色粘土で覆われる。柱穴は見られない。カマドの北脇には貯蔵穴状の掘り込みがある。

遺物 少量の土器片を得たのみで、一括品等は見られない。

帰属時期 遺物から見て5～6期頃の遺構か。

⑪ 第11号住居址

位置 S24-W15 平面形 長方形 規模 長(464)×短400×深-18cm

床面積 (15.0)㎡ 長軸方位 N-2°-E カマド 東壁中央?

遺構 南半部の壁を削平により失う。床面は暗黄褐色礫層中にあり、薄く貼床を施す。カマドは東壁中央下にわずかに焼土が認められ、その痕跡と考えられる。ピット等は検出されなかった。

遺物 北半部の覆土から土師器・須恵器片を少量得た。

帰属時期 出土土器から見て6期の遺構と推察される。

⑫ 第12号住居址

位置 S15-W27 平面形 方形 規模 長(360)×短348×深-14cm

床面積 (8.9)㎡ 主軸方位 N-97°-W カマド 西壁中央・地山削出

遺構 南壁を攪乱で失う。黄褐色土層中に掘り込まれ、床面は平坦かつ堅緻で、カマドに用いられていたものか、大礫が散在する。ある。カマドは左袖部と火床面を残す。ピットは4基検出されたが、柱穴は見られない。南壁下の大形ピット(P1)は船底形を呈する。

遺物 南半部の床面やP1内から土師器甕片・須恵器杯等が出土している。

帰属時期 出土土器の特徴から3～4期頃の遺構と推察される。

⑬ 第13号住居址

位置 S9-W15 平面形 長方形 規模 長480×短460×深-12cm

床面積 (20.5)㎡ 主軸方位 N-83°-E カマド 東壁中央・石組?

遺構 南壁の大部分と東壁の一部を攪乱で失う。西壁のほとんどは立木のため未調査。黄褐色土層中に

床面があり、平坦かつ堅緻である。カマドは袖・天井を失うが、火床の焼土面が残存する。柱穴は見られない。北壁および西壁下には周溝が巡る。南壁下には大形のピットが存在、内部には礫が見られる。

遺物 カマド火床面上から須恵器長頸壺の下半部、土師器甕等が出土。

帰属時期 出土土器から3期の遺構と考えられる。

⑩ 第14号住居址

位置 S3-W24 平面形 (長) 方形 規模 東西288×南北?×深-4cm

床面積 (4.7) m² 主軸方位 N-83°-E カマド 東壁中央?・石組?

遺構 土50に切られる。北部は区域外のため未調査。削平により壁を失う。床面は黄褐色土層中にあり、平坦である。カマドは火床面のみ残存する。カマド右脇には円形ピットがあり、土師器甕の破片がまとまって遺存していた。西壁に沿って周溝状の落ち込みが見られる。

遺物 ピット内からの土師器甕片の他、南寄り床面上には須恵器杯が置かれていた。

帰属時期 出土土器から見て6期の遺構と考えられる。

⑪ 第15号住居址

位置 S3-W15 平面形 (長) 方形 規模 東西340×南北?×深-14cm

床面積 (4.5) m² 東西軸方位 N-19°-W カマド 不明(西壁中央?)

遺構 20住・P46を切る。北半部は攪乱を受け、未調査。小礫混じりの暗黄褐色土層中に掘り込まれ、床面は平坦である。覆土中には角礫が見られる。西壁は半円形に張り出し、煙出し状の掘り込みと円形ピットが伴いカマドかと思われたが、焼土・炭は未検出。柱穴は見られない。

遺物 覆土中から少量の土器片が得られたが、一括遺物等はない。

帰属時期 遺物が少なく不明。

⑫ 第16号住居址

位置 NS0-W6 平面形 方形 規模 長280×短268×深-7cm

床面積 (6.3) m² 東西軸方位 N-69°-E カマド 東壁北寄り?

遺構 北部の床面を攪乱される。床面は小礫混じりの黄褐色土層中に設けられ、平坦である。カマドは東壁の北寄りに存したものの、それに起因すると見られる焼土が北東隅に堆積していた。

遺物 東壁下の床面に土師器甕が潰れていた。

帰属時期 土器から見て3~4期頃の遺構と捉えられる。

⑬ 第17号住居址

位置 NS0-EW0 平面形 (長) 方形 規模 長?×短?×深-20cm

床面積 (4.8) m² 南北軸方位 N-15°-W カマド 不明

遺構 北部を削平により失う。東部は未調査。床面は暗黄褐色土層中にあり、明瞭に検出された。カマドはおそらく東壁下に存するものと思われ、調査範囲内では確認されなかった。他の施設として南西隅に浅い円形ピットが検出された。

遺物 東寄りの床面上から土師器甕、中央から須恵器杯、西壁下から須恵器甕が出土。

帰属時期 出土土器から見て3~4期の遺構と考えられる。

⑮ 第18号住居址

位置 S42-W57 平面形 (長) 方形 規模 長?×短?×深-16cm

床面積 (2.6) m² 主軸方位 不明 カマド 不明

遺構 大部分が区域外のため未調査。南東隅も攪乱を受け失われる。床面は黄褐色土層中にあり、明瞭である。東壁下にピットが見られる。

遺物 覆土中より土器片が少量得られている。

帰属時期 遺物がほとんどなく不明。

⑯ 第20号住居址

位置 S3-W12 平面形 (長) 方形 規模 東西256×南北?×深-16cm

床面積 不明 東西軸方位 N-53°-E カマド 不明

遺構 15住に切られる。小礫混じりの黄褐色土層中に掘り込まれる。遺構の大半が未調査。南西隅には楕円形の大形ピットが伴う。

遺物 皆無に等しい。

帰属時期 15住以前の遺構と捉えられるが、遺物がなく時期不明。

(2) 土坑 (第8・9図)

総数30基が検出された。分布の中心は調査区北部と西部である。大半の土坑は円ないし楕円形を呈し、緩やかに掘り込まれる形態のもので、人為的に集積された礫や、遺物が多く伴う例はほとんどない。これに次いで多いのがロームマウンドと捉えられる三日月形の土坑で、土4・8・13・14・23・24・29・30・47・51・52・60等が該当する。これらの中で特筆すべきものとして上面に焼土面の伴う土30や須恵器杯等土器の伴う土52がある。その他特徴的な土坑としては土師器甕が壁に立てかけられていた土16がある。

(3) ピット (第3図)

51基が検出された。その分布の中心は土坑と同様、住居址の集中する北部および南部の一帯である。配置が整然とし、確実に建物址や柱穴列を構成するものは見られない。

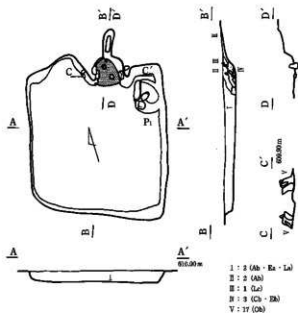
(4) 溝状遺構 (第3・10図)

2条が検出された。いずれも攪乱や削平等で寸断され、保存状況は良好ではない。溝2は14住の東から12住の東を通り、8住と重複する地点まで直線的に走り、向きをやや東に振って4・6住の東方に至る。規模は北部の12住付近で幅60cm内外、深さ20cm程を測り、南部では幅が拡大する。遺物は土師器・須恵器の破片が北部を中心に出土している。

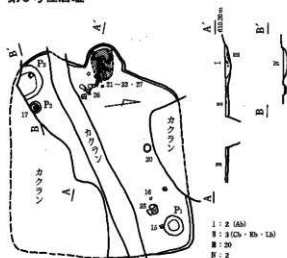
(5) 不明遺構 (第10図)

2住に一部切れ、その南側に存在する。大半が調査区外にあるため遺構の全容は不明である。検出部分での壁は直線的で、斜めに掘り込まれ、平坦な底面に至る。底面は一部住居址のタキ床のような状況を呈する。覆土中には多量の礫が廃棄されるが、遺物は極めて少ない。遺構の性格については当初住居址と考えたため19住と呼称したが、軸の方向が他とまったく異なること、壁が傾斜すること等から溝状遺構等、他の施設の可能性もあったため、現状では性格不明な遺構として取り扱うこととなった。

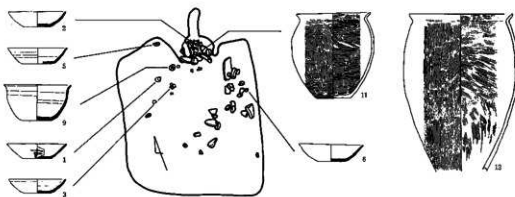
第1号住居址



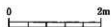
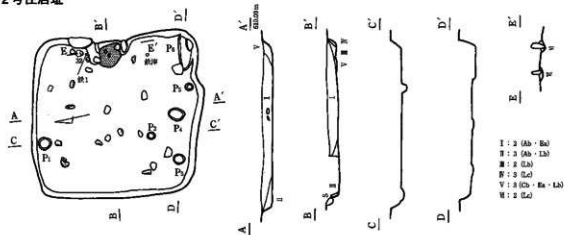
第3号住居址



1住遺物出土状況

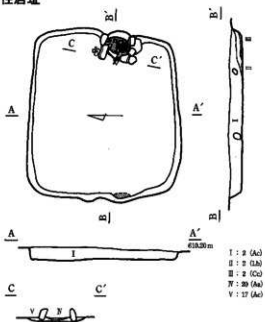


第2号住居址

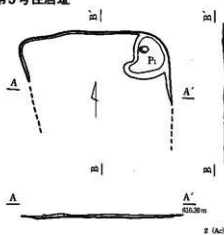


第4図 検出遺構 (1)

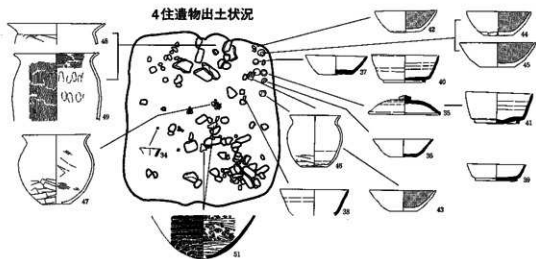
第4号住居址



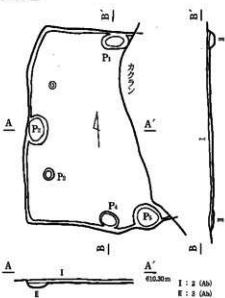
第5号住居址



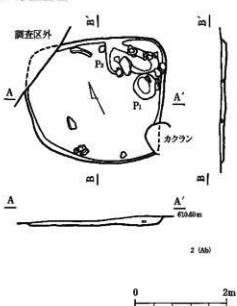
4号住居址出土状況



第6号住居址

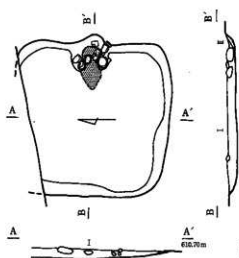


第7号住居址

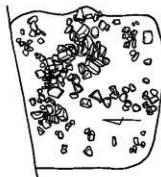


第5図 検出遺構 (2)

第8号住居址

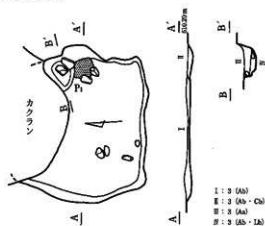


8号遺物出土状況



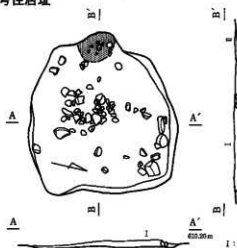
I : 2 (Ac - Ba)
F : 3 (Ab - Ba)

第10号住居址



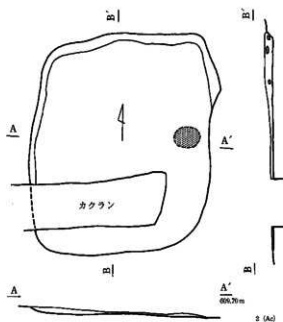
I : 3 (Ab)
E : 2 (Ab - Cb)
F : 2 (Ab)
H : 3 (Ab - Bb)

第9号住居址



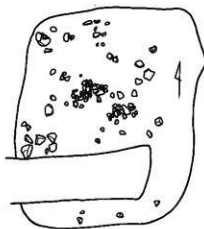
I : 3 (Ab)
T : 2 (Ab - Cb)

第11号住居址



F : (Ac)

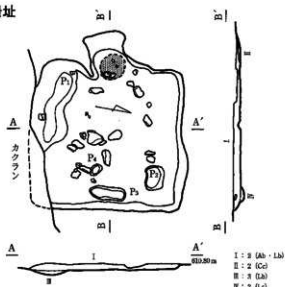
11号遺物出土状況



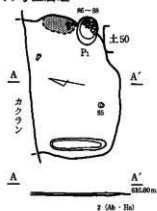
0 2m

第6図 検出遺構 (3)

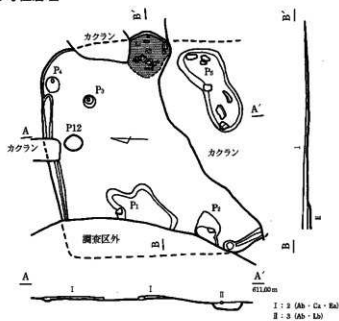
第12号住居址



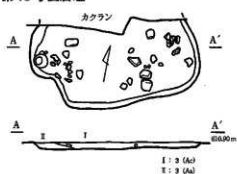
第14号住居址



第13号住居址



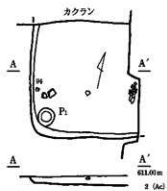
第15号住居址



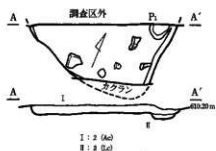
第16号住居址



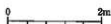
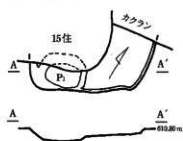
第17号住居址



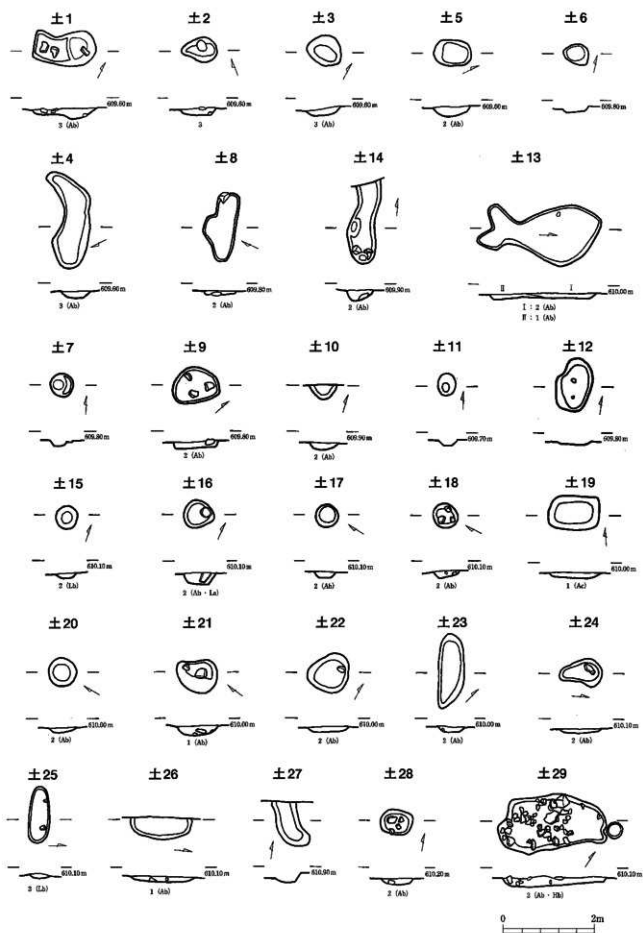
第18号住居址



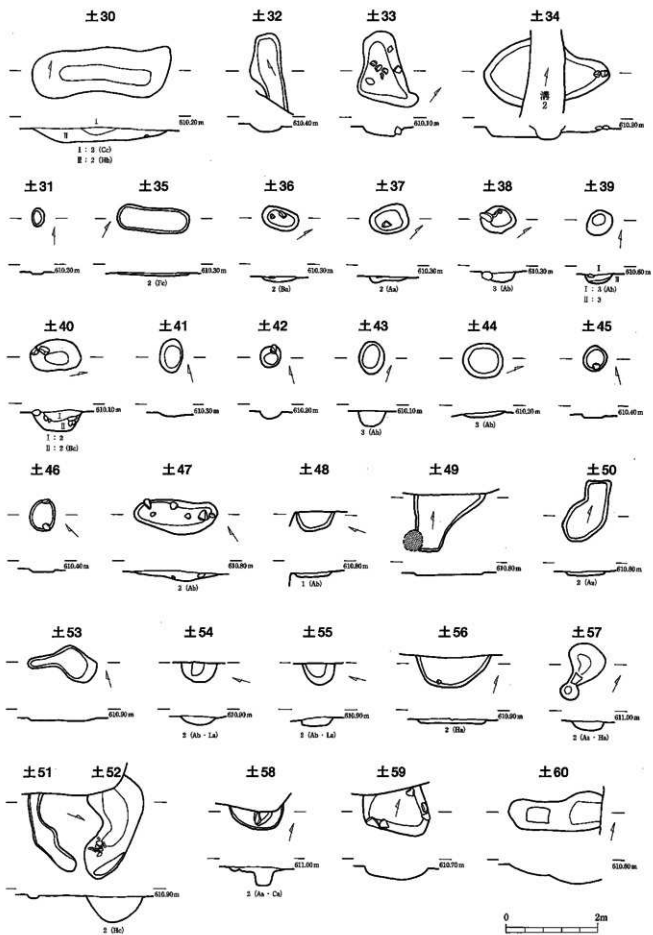
第20号住居址



第7図 検出遺構(4)



第8図 検出遺構 (5)



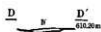
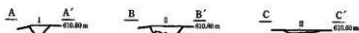
第9図 検出遺構 (6)

溝1



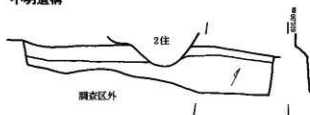
I : 2
II : 2 (Ab)

溝2



I : 2 (Ab)
II : 2 (Ab - Bb)
III : 2 (Aa)
IV : 2

不明遺構



第10図 検出遺構 (7)

2. 出土遺物

(1) 土器 (第11～15図)

今回の調査では、竪穴住居址・土坑・遺構外検出面から土器が出土しており、総計106点を図化・提示している。これらは、奈良～平安時代前半の時期的な範疇に含まれ、調査地における集落の存続時期を示すものとして捉えられる。しかし、遺構の遺存状況が必ずしも良好とは言えず、出土量に恵まれない遺構出土土器群もある。このため、土器群の様相や時期などが判然としないものも多い。出土したすべての土器の種別をみると、須恵器・土師器・黒色土器Aに限定される。特に食膳具をみると、圧倒的に須恵器が主体であり、僅かに黒色土器Aがみられる。以下、各遺構出土土器群の様相を概観する。なお、本書で用いる土器の種別・器形・時代観は、例言の7項に掲げた文献に従った。

①住居址出土土器

第1号住居址出土土器

食膳具は、須恵器杯A (1～7)、杯B (8)、鉢A (9・12) がみられる。杯Aは、外傾が強く器壁が薄く、ロクロ目が目立つものが多い。外傾指数(註)は5が91のほかはすべて100以上である。8の体部外面には、墨書がみられる。鉢Aは、大・小2法量みられる。貯蔵具はみられない。煮炊き具は、土師器甕B (13)、小型甕B (11) が出土している。本址土器群は、6期 (9世紀前半) に帰属するものと考えられる。

第2号住居址出土土器

食膳具は、須恵器杯A (29)・杯B (30)・蓋B (28)、黒色土器A (32) がある。32の底部には、手持ちヘラ削り痕がみられる。煮炊き具は、土師器甕B (33)・小型甕B (31)、貯蔵具はみられない。本址土器群は、出土量が少なく判然としないが、5期 (8世紀末～9世紀初頭) と考えられる。

第3号住居址出土土器

食膳具は、須恵器杯A (17)、杯B (18～20)、蓋B (14～16)、鉢A (24) がみられる。19の底部には、回転糸切り痕が残る。体部はやや外傾し、底部より丸みを帯びて立ち上がる。20は、底部が大きく下方に垂れ下がった焼成不良品である。底部中央には、意図的に穿孔した痕跡が確認できる。煮炊き具は、土師器甕B (21～23・26・27) が5点出土した。貯蔵具は須恵器甕 (25) の1点のみである。本址土器群は、5～6期 (8世紀末～9世紀前半) に帰属するものと考えられる。

第4号住居址出土土器

食膳具は、須恵器杯A (36～37)、杯B (38～41)、蓋B (35)、黒色土器A (42～45) で構成される。杯Aは、底部にすべて回転糸切り痕がみられる。黒色土器A杯Aは、42・44の底部は手持ちヘラ削り、43・45は回転糸切りである。煮炊き具は、土師器甕B (49・50)、甕C (48)、小型甕C (46・47) がある。貯蔵具は、長頸壺C (34) のみ。本址土器群は、5期 (8世紀末～9世紀初頭) に比定される。

第5号住居址出土土器

出土した土器は土師器小片のみであるため、様相・時期ともに判然としない。

第6号住居址出土土器

図化できたのは、須恵器杯A (60・61)、蓋B (59)、土師器小型甕A (62) の4点のみである。杯Aは、61がやや丸みを帯びて立ち上がり、60は大きく開く。外傾指数は、61が83、60が102とばらつきがみられる。出土点数が少なく様相が判然としないが、須恵器杯などの形状から6期 (9世紀前半) に帰属するものと考え

られる。

第7号住居址出土土器

出土遺物が少なく、図化提示できたのは3点のみ。57は須恵器杯Aの底部、56は須恵器蓋B、58は土師器甕Aである。57は器壁が薄くロクロ目が目立ち、やや開き気味に立ち上がっているため、古い時期の様相はみられない。本址土器群の時期は判然としないが、6～7期（9世紀前半～後半）より古い時期は考えられない。

第8号住居址出土土器

本址も出土量が少なく図化できたのは4点のみである。須恵器杯A（54）、蓋B（53）、長頸壺（52）、土師器甕A（55）がみられる。54は底部回転糸切りされ、外傾指数は86.1を示す。出土点数が少なく、時期などは判然としない。

第9号住居址出土土器

図化できたのは5点のみ。70は須恵器杯Aである。底部回転糸切りされ、器壁薄く体部が大きく開く。69は、黒色土器A杯Aである。71～73は土師器甕Bである。出土点数が少なく時期は判然としないが、杯の形態などからみると5～6期か（8世紀末～9世紀初頭）。

第10号住居址出土土器

出土量は非常に少なく、3点のみ。74は須恵器杯Aである。底部回転糸切りされ、体部はやや丸みを帯びて立ち上がる。75は黒色土器A杯Aである。76は須恵器甕の底部である。本址も出土量が少なく判然としないが、杯の特徴から5～6期（8世紀末～9世紀初頭）ぐらいに考えられる。

第11号住居址出土土器

6点図化している。64～67は須恵器杯Aである。器形は、体部が大きく開くもの（67:外傾指数107.8）と、そうでないもの（65:外傾指数83.7、66:外傾指数77.1）が混在している。底部はすべて回転糸切り調整である。63は須恵器杯B、68は土師器甕Aである。本址土器群は、出土量が少なく判然としないが、須恵器杯の形状などから6期（9世紀前半）と考えられる。

第12号住居址出土土器

本址も出土量が少ない。図化できたのは、4点のみ。1は、須恵器杯Bである。底裏中心部に回転糸切痕がみられる。2～4は土師器甕Bである。2の底部には木葉痕が残る。3・4は輪積み成形痕が残る長胴タイプのもので、古い要素がみられる。これらのことから、出土点数が少なく判然としないが、3～4期（8世紀中頃～後半）の時期が考えられる。

第13号住居址出土土器

4点を図化している。81は土師器杯である。ロクロ成形で、底部には手持ちヘラ削り痕が残る。器形は、須恵器杯Aに近似している。83・84は、土師器甕である。長胴タイプで輪積み成形痕が残る古い要素を持つものである。82は下半部しか残存していないが、須恵器長頸壺と考えられる。これは、松本地方でみられる青灰色でやや粗い胎土のものとは異なり、白色で緻密な美濃須衛窯産のものに類似している。体部には、自然釉が掛かる。底部から体部下半にかけて、回転ヘラ削り調整される。本址土器群は、3期（8世紀中頃）と考えられる。

第14号住居址出土土器

出土量が少なく、4点を図化したのみである。85は、須恵器杯Bである。底部は、回転ヘラ削りが省略され、回転糸切り痕が残る。体部は、丸みを帯びて立ち上がる。86は須恵器杯Aである。体部はやや開き気味に立ち上がり、外傾指数は92を示す。87・88は土師器甕Bである。須恵器杯の形状などから、本址土器群は、6期（9世紀前半）に帰属するものと考えられる。

第15号住居址出土土器

出土量は非常に少なく、図示できたのは2点のみである。89は、須恵器蓋B、90は黒色土器A杯Aである。時期等は、資料数が少なく、判然としない。

第16号住居址出土土器

3点図化している。92は須恵器蓋B、91は須恵器長頸壺、93は土師器甕Bである。93の甕は、口縁部の外反が弱く、器壁が厚いため、古い要素がみられる。時期的には判然としないが、91の須恵器蓋と93の甕の形状を考慮すれば、3～4期（8世紀中頃～後半）より新しくは考えられない。

第17号住居址出土土器

出土量が少なく2点図示できたのみ。94は、甕である。底裏から体部まで回転ヘラ削り調整される。注口部分は欠損しており不明である。体部の紋様帯はみられない。95は土師器甕の底部である。底裏には、木葉痕が残る。時期は、甕や甕の特徴から3～4期（8世紀中頃～後半）か。

第20号住居址出土土器

図化できたのは、須恵器杯A（96）のみ。時期、土器群の様相などは判然としない。

②不明遺構出土土器

2点のみ提示できた。106は須恵器杯Bの底部、105は須恵器杯Aである。時期等は判然としない。

③土坑出土土器

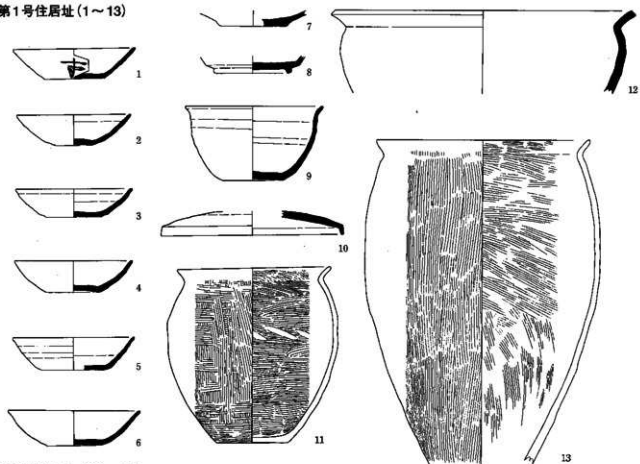
土13・16・32・52から図化可能な土器が出土した。しかし、各土坑とも出土量が少なく、その様相は判然としない。土13からは須恵器杯A（99）が出土した。底部には、回転糸切り痕がみられる。土16は、土師器甕B（101）が1点のみ。長胴で、輪積み成形痕がみられる古い要素のみられるものである。土32からは、須恵器甕の口縁部が1点（100）のみ。土52からは、杯Bが2点（97・98）出土した。底裏には回転ヘラ削りが施されている。2点ともに、ほぼ同様な法量である。

注 外傾指数は、 $(\text{口径}-\text{底径}) / 2 + \text{器高} \times 100$ でもとめた。

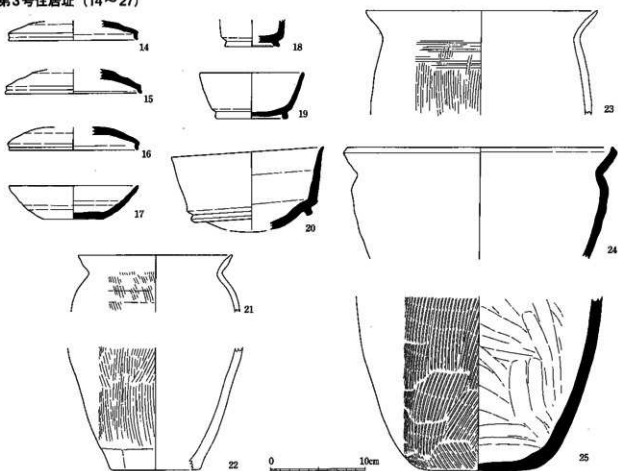
(2) 鉄器 (第15図)

2住から2点の製品と鉄滓1点が出土している。1・2は鉄釘と思われる。1はわずかに先端部と頭部を欠き、現存長7.6cm、中央部での厚さ0.5cmを測る。2も両端を欠き長さ4.5cmを残すのみである。断面形は長方形を呈し、長辺0.6cmを測る。鉄滓は直径5cm程の塊状を呈する。

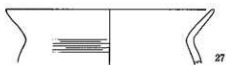
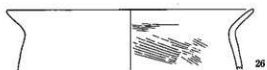
第1号住居址 (1~13)



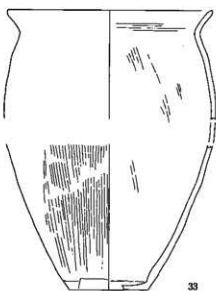
第3号住居址 (14~27)



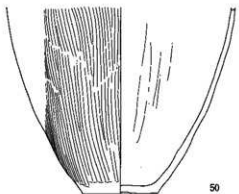
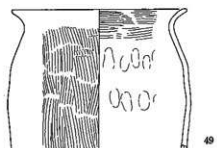
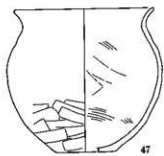
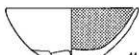
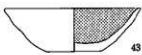
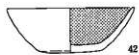
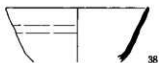
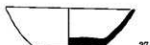
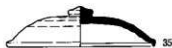
第11图 出土遺物 (1)



第2号住居址 (28~33)

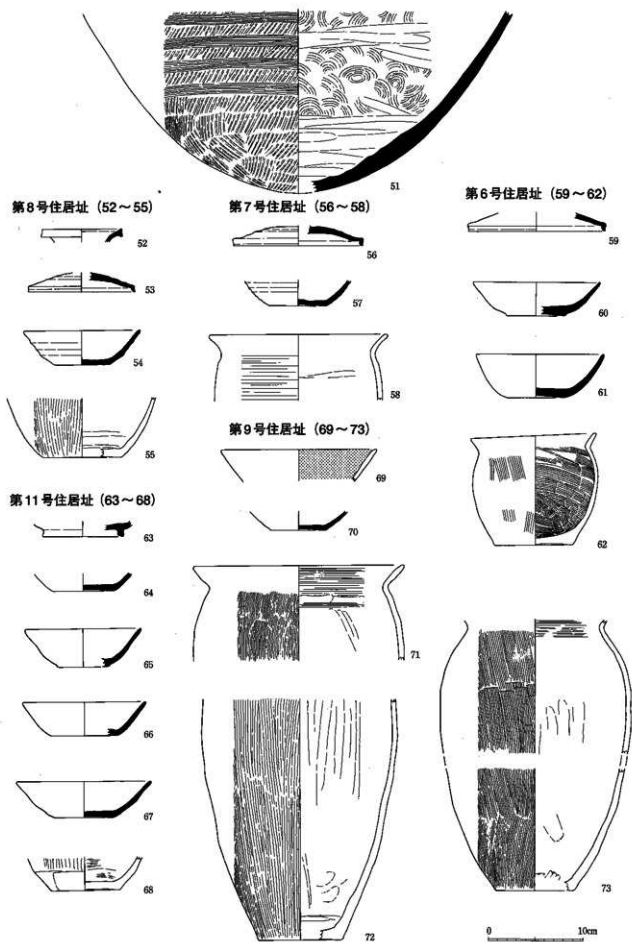


第4号住居址 (34~51)



0 10cm

第12图 出土遺物 (2)



第13图 出土遺物 (3)

第10号住居址 (74~76)



74



75



76

第12号住居址 (77~80)



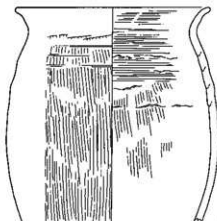
77



78



79



80

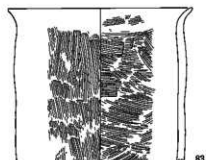
第13号住居址 (81~84)



81



82

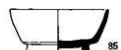


83

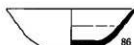


84

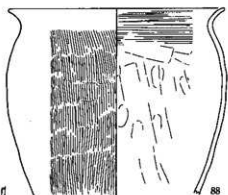
第14号住居址 (85~88)



85



86

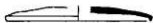


88

第16号住居址 (91~93)



91



92

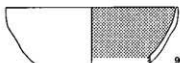


87

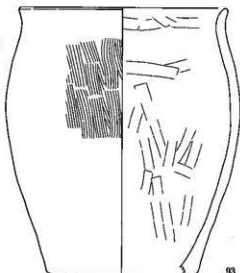
第15号住居址 (89·90)



89



90

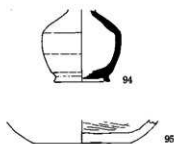


93

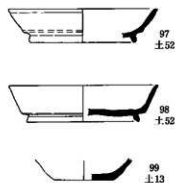


第14图 出土遺物 (4)

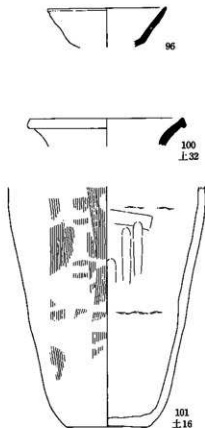
第17号住居址 (94~95)



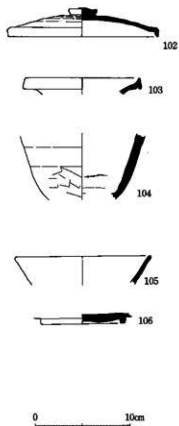
土坑 (97~101)



第20号住居址 (96)



検出面 (102~106)



鉄器 (1・2)



V まとめ

前章で述べてきたように、今回の調査地点からは奈良～平安時代に至る集落址の存在を確認することとなった。市街地の北部、岡田地区を除く東西大門沢川流域の古代集落としては旧射的場西遺跡に次いで2遺跡目の発掘調査である。これまで蠟ヶ崎地区をはじめとするこの地域では早くから市街化が進行しており、遺跡の分布や時代、性格等が他地域に比べて著しく不鮮明となっていた。まずこの点で今回の発掘調査は成功を取めたものと言えよう。

次に露呈された集落址であるが、後世の削平や擾乱が全体に著しく失われた情報があまりにも多いため、その全体像を語るには良好とは言えないが、調査区の東北寄りでは遺構分布の密度が濃く、南（西）側で薄い状況が看取される。このことから集落の中心は調査区東北部から東方、西大門沢川までの間に存在するものと考えられ、あるいは既に建物が存在し大規模な削平により原地形の失われ、状況が不明な調査区北側から松本深志高校方面にまで拡大する可能性もあろう。

検出された住居址の特徴について観察すると、13住にその可能性を残すものの大半の遺構は長辺3～4m程の中小規模の住居址であり、柱穴も有していない。カマドは1住で煙出しが長く、袖に石材よりも粘土を多用する点で奈良時代的な要素を残すものの、4住等では骨組みに石材を多用、すなわち偏平礫をハの字形に3列程しっかりと埋め込み煙出しも短い、9世紀以降の住居址によく見られる形態である。屋内施設としてはカマド脇に貯蔵穴や壁の張り出しが見られるものがしばしば見られた。

住居址の廃絶時に行われた行為の状況を示す例としては1・4・8住等が良好で、1住ではカマドの天井部のみが意図的に取り外され、内部に土師器甕が立て掛けられていた。カマド脇にもは須恵器鉢が伏せ置かれる。4住でもおそらく意図的に外されたカマドの天井石が住居内に廃棄され、土師器杯・小型甕や須恵器杯・蓋が南東隅に整然と置かれていた。8住では覆土中に多量に礫が廃棄されていたが、遺物はカマド内の土師器甕片を除いて皆無に等しい状況であった。

住居址以外の遺構としては今回の調査範囲では掘立柱建物址が見当たらなかったが、これは擾乱や削平を受けた範囲が大きいことにも起因すると思われる。溝状遺構のうち、溝2についてはほぼ地形の傾斜方向に走っており、覆土中の遺物から集落と同時期に設けられたものと考えられる。砂礫等流水性の堆積は見られないが、残存状況の良好な12住付近で見ると逆台形にしっかりと掘り込みをなし、覆土中には礫が廃棄されている。

遺物については土器以外のものが非常に乏しい中、2住からのみ2点の鉄器と鉄滓1点が出土し、注意される。土器については奈良時代末から平安時代初期、すなわち8世紀末から9世紀前半の様相を呈しており、1・4住等で比較的多まった資料が得られている。

蠟ヶ崎遺跡をとりまく市街地北部は、現在の市中心部に広がっていた広大な低湿地に臨んで南向きの間斜面をなしており、居住環境としては非常に適地と言える。蠟ヶ崎丘陵帯に分布する後期古墳や今回の調査地点と隣接する中期の腰塚古墳、あるいは旧射的場西遺跡における古墳時代後期の集落等、早くからこの地が墓域や居住域として利用されてきたことを物語る。とりわけ居住地としては東西大門沢川に沿った地域が利用されてきたのであろう。今回調査された蠟ヶ崎遺跡もそうした居住の地の一つとして機能したものと捉えることができよう。

最後に調査の実施に際し多大な配慮ご協力を頂いた県住宅部をはじめとする関係者、県営蠟ヶ崎団地の皆様、また現地説明会に際してご協力頂いた北部公民館、何よりも説明会に多数参加された住民の皆様に感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。

カラー図版

調査区全景 (北から)



同上 (西から)



調査区中央部

右上：2住

左下：8住





第1号居住址
完掘状況（西から）



同上
遺物出土状況（西から）



同上
カマドの状態

第2号住居址
完掘状況 (西から)



同上
カマド (西から)



第3号住居址 (左)
第18号住居址 (右)
完掘状況 (東から)





第3号住居址
カマド (南から)



第4号住居址
完備状況 (西から)



同上
遺物出土状況 (西から)

第4号住居址
カマドの状況 (西から)



同上
遺物出土状況 (北から)



第5号住居址
完掘状況 (北から)





第6号住居址
完掘状況（北から）



同上
遺物出土状況



第7号住居址
完掘状況（東から）

第8号住居址
完掘状況 (西から)



同上
遺物出土状況 (西から)



同上
カマド (西から)





第9号住居址
完掘状況 (西から)



第10号住居址
完掘状況 (西から)



第11号住居址
完掘状況 (西から)

第12号住居址
完掘状況(東から)



同上
カマド(東から)



同上
南西隅のピット(東から)





第13号住居址
完掘状況（北から）



同上
カマド（西から）



第14号住居址（右）
第2号溝状遺構（左）
完掘状況（北から）

第14号住居址
ピット内遺物出土状況



第15号住居址
完掘状況 (西から)



第16号住居址
完掘状況 (西から)





第17号住居址
完掘状況（西から）



同上
遺物出土状況（西から）



第20号住居址
完掘状況（北から）

第1号土坑



第16号土坑



第29号土坑 (右)
第30号土坑 (左)

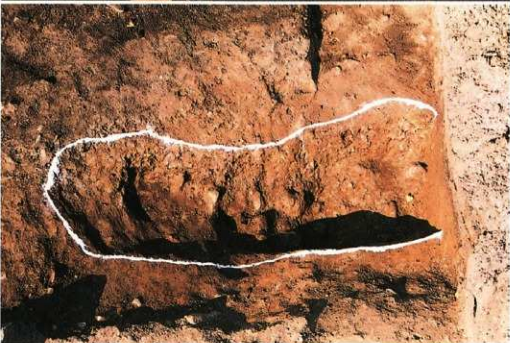




第51号土坑 (上)
第52号土坑 (下)



第52号土坑
遺物出土状況 (北から)



第60号土坑 (南から)

第59号土坑（北から）

第14～16号土坑・ピット
（西から）

第19～26号土坑（北から）





第12号住居址 (上)
第2号溝状遺構 (下)
(東から)



第2号溝状遺構南部
(北から)



不明遺構 (北から)



第4号住居址出土土器



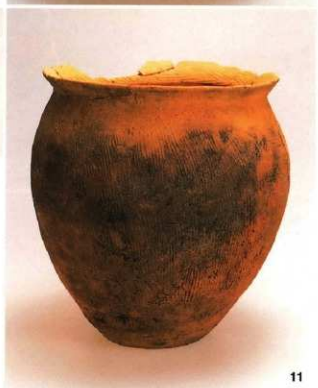
5



3



6



11



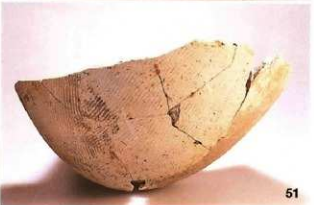
9

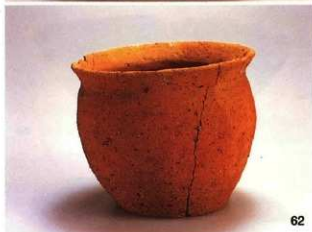


36



37







重機による表土除去



ラジコンヘリによる航空撮影



現地説明会

蠍ヶ崎遺跡緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしありがさきいせききんきゅうはくつちようさほうこくしょ							
書名	長野県松本市蠍ヶ崎遺跡緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.134							
編者名	竹原 学・竹内靖長・森 義直							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0873 長野県松本市丸の内3番7号 (記録・資料保管:松本市立考古博物館・〒390-0823松本市中山3738-1・TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	平成10(1998)年2月27日(平成9年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
蠍ヶ崎	長野県 松本市 蠍ヶ崎	20202	154	36度 14分 36秒	137度 58分 20秒	19981017～ 19981129	1,778	県営住宅蠍ヶ崎 団地建設に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
蠍ヶ崎	集落跡	奈良～平安	聖穴住居址 土坑 ピット 溝状遺構	19棟 30基 51基 2条	土器(土師器・須恵器) 鉄器(釘)・鉄滓	西大門沢川右岸 の台地上に展開 する古代集落の 資料を得た。		

松本市文化財調査報告 No.134

長野県松本市

蠍ヶ崎遺跡

—緊急発掘調査報告書—

発行日 平成10年2月27日

発行者 松本市教育委員会

〒390-0873

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社 総合印刷

